

2023. 1. 29. 主日礼拝説教
聖書：ルカによる福音書15章1～7節
『見失った羊』

「上手な絵描きは本当の絵描きではないよ。へたくソな絵描きこそ本当の絵描きです。」と棟方志功は言いました。いわば上手下手と本当とは別のことだということでしょう。

わたしたちはずいぶん以前から、それこそ物心がついたころからかもしれません。その頃から上手下手で判断されてきましたし、反対に他者に対してもそのように評価してきたようにおぼえます。それでは上手なことは本当の生き方で、下手なことは本当でない生き方かといいますと、どうやらそのところが怪しくなるわけです。

本日の聖書の箇所は説教題通りに「見失った羊」という小標題が掲げられています。1節の「徴税人や罪人」という言葉は2節の「ファリサイ派の人々や律法学者」との対比で語り出されます。つまり、自他共に「上手な生き方」であると信じるファリサイ派たちに言わせると「下手な生き方」の代表が「徴税人や罪人」だというのが当時の社会規範であったことを窺わせます。ファリサイ派たちは自分たちこそ「本当」のものであると信じていたにもかかわらず、イエスが徴税人や罪人と食事をしているのを見て非難します。なぜならば、食事を共にするというのは対等な関係の宣言だからです。

本来ならば、自分たちファリサイ派と食事をすべきなのに何という侮辱だということでしょう。

そのような人生感の中に閉じこもるファリサイ派の人々に対してイエスは見失った羊のたとえを話されたとルカは記します。この箇所はよく「つまづいた人」を復帰させるかのような解釈をしまいがちですが、ルカはそんな「ワガママの肯定」を描こうとしたのではありません。そうではなく、自分自身の内に在る「罪の再発見」が描き出されてゆくのです。

ルカはファリサイ派たちを「自らを省みない者」の代表として用います。しかし、初代教会を「自らを省みる者」とするとルカは宣言するのです。

それはファリサイ派のように人を上手下手で二分してしまい、自分自身は一点の曇りもないかのような座を設けてあぐらをかく人間理解(=神理解)を問い直すのです。

初めに述べましたように、わたしたちは上手下手の世界に埋没しています。けれども、そのことと本当のこととは異なるのです。キリスト者とはいかなる上手さよりも本当のものを選ぶ者のことを意味します。

このたとえ話は羊の帳尻合わせの物語ではありません。これはイエスが「わたし」の質を問われる言葉なのです。イエスはわたしの内にたとえ1つでもファリサイ派と同じような思い違い(=罪)があるならば、それを省みる自分自身を養いなさいと言われるのです。そこから、これまで本当のものだと夢疑わなかったものが、実は本当のものでなかった、ニセものであったことにやがて気づかされてゆくのではないのでしょうか。

わたしたちは信仰というと一本槍のように夢想してはいないのでしょうか。そうではありません。自分自身の内に、絶えずニセものを見出し、それと相對するところの作業を放棄してしまってはならないのです。信仰において上手なこと、本当のこととは、自分の信仰を常に疑いうる柔軟さのことなのです。これが見失った羊のたとえなのです。